

熊本地域医療センターだより

院長 杉田裕樹

令和4年(2022年)8月発行

熊本地域医療センター電話番号(代表) 096-363-3311 FAX 096-362-0222

〒860-0811 熊本市中央区本荘5丁目16番10号

2022 9 月号 通算208号

熊本地域医療センター 理念

かかってよかった。
紹介してよかった。
働いてよかった。
そんな病院をめざします。

contents

- わかりやすい診療部紹介 ~小児科~…………… P1
- わかりやすい部門紹介 ~看護師検査部門~… P2
- 外科診療におけるフレイルの重要性…………… P3
- ドローン撮影を行いました! ……………… P4

わかりやすい 診療部紹介

～小児科～

小児科部長 ^{やない}柳井 ^{まさあき}雅明



熊本市医師会の先生方には平素より大変お世話になっております。今回は小児科の紹介をさせていただきます。当院小児科の特徴は「開業小児科」、「熊本大学病院小児科」と「医師会病院小児科」が三位一体となって行っている病院併設型の小児初期救急医療

(熊本市急患センター)と二次救急医療(熊本県小児救急医療拠点病院)体制＝「熊本方式」の中心的役割を担っていることです。新型コロナウイルス感染症流行後もPPEの供給が乏しく不慣れな状況下で、急患センターに出動して、発熱者の診療に当たっていただきました先生方には、この場をお借りして心から敬意を表するとともに感謝申し上げます。新型コロナウイルス感染症流行後に小児のコロナ患者の診療負担が増す一方で、一般感染症は激減し、急患センター受診者は流行前の約1/4まで減少しました。それに比例して小児の入院患者も減少した結果、小児科診療部門は病院経営上、厳しい状況が続いています。

また、2024年から本格的に始まる「医師の働き方改革」で急患センターでの小児科深夜外来の存続が困難となる可能性があります。このように小児救急医療の厳しい現実に直面していますが、将来ある子どもたちのために、引き続き小児科部門一同で当科の役割をしっかりと果たしていく所存です。

もう一つの特徴は、アレルギー診療に重点を置いていることです。平成25年度から小児アレルギー外来を開設し、主に食物アレルギーと気管支喘息、アトピー性皮膚炎の診療を行っています。平成29年にはアレルギー専門医教育研修施設として認定され、令和元年からは呼吸器内科、皮膚科と連携してアレルギー診療センターを開設し、熊本県アレルギー疾患連携病院の役割も担っています。また、平成20年に開設した熊本県予防接種センターでは、他施設で予防接種を受けることができないハイリスク者や海外渡航者等に対して予防接種を行ってきました。新型コロナウイルスワクチンに関しては、診療所や集団接種会場で接種できないハイリスク者に対して、ファイザー製、モデルナ製、アストラゼネカ製のワクチン接種を行ってきました。現在は熊本県からの依頼でノババックス製ワクチンの接種を行っています。

以前より、少子高齢化が進む背景があり、着実に小児の外来受診者や入院患者が減少していくことが予想されるため、将来的に地域における小児医療の集約化・重点化が必要と考えられていました。新型コロナウイルス感染症流行後に、全国的にその動きが急加速化しています。このような流れの中、今後の当科が担うべき小児科診療の方向性に関しても熊本市内の他の基幹病院と協議を重ねています。

以上のように、私たちは、はなはだ微力ではありますが、「地域に貢献する小児医療」を目指してまいりますので、今後ともどうぞ、よろしくお願い申し上げます。

わかりやすい 部門紹介

～看護師検査部門～

安心安全な検査提供を目指して

検査室主任 からた やすえ
唐田 裕恵

当院には、「看護師検査部門」があります。他院にはない、検査に特化した看護部門です。当院の開設以来、進化を続ける検査のクオリティーに
対峙でき、検査目的で訪れる紹介患者さんや、確定診断や治療効果の評価に欠かせない、質の高い検査提供を行うために設置されたという歴史があります。検査といえば、CTやMRIなどの画像診断や、内視鏡検査などをイメージすることが多いと思います。しかし、検査室看護師は、これらの検査対応だけでなく、ハイスペックなIVR、
県下有数の治療件数を誇る治療内視鏡など、診断から治療までを一貫して対応しております。特に、気管支内視鏡は、他院では実施できない高度治療にも対応しており、基幹病院からの依頼も年々増加している状況です。

では、この看護師検査部門に従事する看護師の役割について、ご紹介いたします。検査の質は、「正確な画像診断」「低侵襲」「リスク低減」に他ならないと考えます。そのため、日進月歩する検査の知識・技術の習得や、他職種とのチーム医療、細やかな問診によるリスク判定に努めております。「歩いてきた患者さんを歩いて帰す」をモットーに、精度の高い検査対応に邁進する日々です。

次に、当院の強みの一つに、24時間365日救急対応があります。休日夜間帯における緊急検査対応は、これまで検査室看護師をオンコールで呼び出すしかありませんでした。オンコール体制のデメリットは、患者さんのニーズに即応できないこと（つまり、オンコール者の出勤までのタイムラグが生じます）や、非勤務が拘束されるといった2点があげられます。そのため、休日夜間帯の緊急検査に即応することを目的として、外来/検査室の一元化に着手いたしました。今では外来看護師による緊急検査対応が可能となり、これは、検査室看護師による教育の成果です。

また、看護部の教育計画において、「内視鏡看護院内認定研修」があります。この研修では、検査室看護師が知識を伝授し、OJTにおける実務経験のサポートを行っており、これまでに延べ35名の内視鏡看護院内認定看護師の誕生に貢献してきました。

看護師検査部門の看護師配置は、現在13名です。第7波の影響により、突発的な欠勤が増えております。だからこそ、所属する13名が全検査部門のポリバレンタNsになり、有事でも安心・安全な検査提供が出来る部署を目指していきます。

熊本地域医療センター勉強会のお知らせ

日時／2022年9月26日(月) 19:00～20:00

形式／ハイブリッド方式 オンライン参加 or 会場参加
オンライン参加：ZOOM 会場参加：2階多目的ルーム

申し込み方法／kumamotochiiki@gmail.com (※1) までメールにて「所属医療機関名」および「氏名」を記載し、お送りください。(後日、詳細な参加方法についてご案内いたします。)

※会場参加を希望される方は、事前にお申し込みください。
人数制限によりご案内できない場合がございます。
※予定が変更になる場合がありますのでご注意ください。

(※1) 申し込みアドレス



①症例報告

『Conversion surgery を施行した局所進行
肺癌の一例』

外科 富田 真裕 医師

②特別講義

『当科における胆膵疾患治療の実際』
CCO：その他

消化器内科 岩下 博文 医師



外科診療におけるフレイルの重要性



外科医長 おかべ 岡部 ひろひさ 弘尚



先日院内配信の全職員対象の講義依頼をいただき、高齢者診療に関する内容とのことで、自分に取り組んできたフレイルの話を行いました。今回はその内容を一部ご紹介します。

大学院を卒業して留学後、2016年に1年間済生会熊本病院に赴任いたしました。その時に見つけた、自分の診療の宝物の一つがフレイルです。70代の男性で肝切除後を予定していましたが、もともと脳梗塞の既往があり、動作緩慢症状がありました。抗凝固薬を手術のために休薬し、休薬後に脳梗塞を発症されました。症状は軽度構音障害ですぐに回復し、神経内科の先生の許可のもと1か月後に肝切除（S5/6切除）を施行しました。術後にドレーンを抜去後、腹腔内膿瘍を発症し、穿刺ルートが確保できないことから再手術で洗浄を行い、ドレーンを留置しました。ところが、すべてのドレーンがみるみる感染調となり、ドレーン交換で術後35日目に退院されました。自分の経験上、肝切除をこれまで約60例（メジャーが30例）執刀し、残念ながら術後合併症分類のV（合併症死亡）に相当する、2年以上の抗癌剤治療後にConversion surgeryを施行し失った症例を1例経験しましたが、合併症分類のIII bに相当する再手術例はこの1例のみです。胆汁漏れが2例で、この症例には胆汁漏れは認めませんでした。もともとの見た目がよわよわしく、感染がおこった理由について、この症例には強く患者要因が存在するのではないかと感じ、統計学的に調べることにしました。

当時サルコペニアの概念が広がり、サルコペニアの症例は合併症を起こしやすいといった考え方が非常に受け入れやすかったため、症例数の多い大腸癌手術 65歳以上269例でサルコペニアと術後の合併症の関連性を調べました。ところが、全く関連性は認めませんでした。しかし、そのような期待することが調べるとそうではないということは大学院の時にさんざん経験しましたので、決してあきらめる気はさらさらありませんでした。済

生会ではリハビリ介入が必要な程度を評価する指標としてフレイルを用いており、2005年にCMAJというジャーナルに出版された定義（Clinical frailty scale）に基づいて、患者さんの状態を7段階に分類します。要は見守りや介助・支えが生活に必要な方はフレイルということになるような非常に直感的な指標で、外科診療にも非常にマッチするのではないかと強く感じ、フレイルと合併症の関連性を調べました。すると、きわめて強い関連性を認め、普遍的な事実ではないかと確信し、済生会の肝切除例（65歳以上で143例）においても同様の検証を行い、フレイルが合併症と強く結びつくことを見出し、一連のフレイルシリーズとして世界へ情報発信いたしました（Okabe H et al. Am J Surg 2018, Gastrointest Tumors 2019, Indian J Surg 2019）。自分はCMAJの定義を用いて外科診療におけるフレイルの重要性を初めて世界に発表したと自負しておりますが、現在では学会セッションでかならずフレイルのセッションを目にしますので、決してめずらしい言葉でもなんでもなくなりました。現在熊本地域医療センターに2019年から在籍し、大腸の手術例527例でフレイルと合併症の関連性を調べるとやはり強力に結びついており、見た目がよわよわしい患者さんに合併症が起りやすいという非常にわかりやすい概念がフレイルというものさしを用いると容易にみえてくることをあらためて実感しました。そこで大事なのが、合併症が起りやすい例を容易にみつけることはできても、それを改善することができなければ患者さんに利益がないということです。どのようなことができるかを自分なりに済生会時代から考えてきました。字数制限がありますので、今回はここまでとして、次回（いつになるかは決定していませんが・・・）はその対策とこれまでとりこんできた実績についてご紹介します。次から次に課題が見えてきますので、終わりのない戦いですが、目の前の患者さんに利益を還元できるようにこれからも研鑽を積んでまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

ドローン撮影を行いました！

地域医療連携室 いのうえ ひろし 井上 洋志



本年7月に当院外観のドローン撮影を行いました。広報活動に使用する当院外観の写真が少なく、新たに撮影を検討していたところ、杉田院長よりドローン撮影のご提案をいただき、今回の撮影に至りました。

撮影には、株式会社クロス・クリエイション様にご協力いただきました。前日まで撮影日の天気予報は雨でしたが、当日は天気恵まれ快晴のなか、撮影を行えました。実際、ドローンを目の当たりにしたのは初めてで、想像以上に大きい印象を受けましたが、今回は「DJI Inspire2」というモデルでドローンの中では中程度の大きさだったようです。飛行する際のプロペラ音も凄まじく、

上空に飛び立った後も聞こえてくるほどでした。操縦者（パイロット）用のカメラと撮影者（カメラマン）のカメラが別々に搭載されており、互いに異なる映像を確認しながら撮影を行う、ツーオペ撮影方式で私も一緒に確認しながら丁寧に撮影していただきました。今回撮影いただいた写真は、当院広報誌「診療案内2022」「患者様向けパンフレット2022」に使用させていただきました。撮影にご協力いただき誠にありがとうございました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

ドローンには、今回のような広報目的の空撮に限らず、農業／物流／災害救助／点検／セキュリティなど多くの目的で使用されています。そう遠くない未来では、より多くの目的のためドローンが活用されていく時代になっているのかもしれませんが、今後も機会があれば、ドローンを活用していこうと思います。



熊本地域医療センター

■医師へ直接紹介される方はこちら

☎096-363-3311 (代表)

■何科に紹介するか迷っている場合はこちら

※ベテラン看護師が対応いたします！

(平日9:00~17:00) ☎096-372-0600

■画像診断・内視鏡などの検査予約はこちら(連携室)

☎096-366-1323

編集後記

Y ベーブ・ルース以来104年ぶり二桁勝利＆二桁本塁打の大谷翔平選手。FA権を得るかどうかが関係なく獲得の声が多数あがる。一方で、唯一の問題は高い年俵とか。彼の育て方に秘密がありそうで気になります。

K 長年お世話になっている人生の大先輩から、誕生日のお祝いをいただきました。同級生の主人と合わせて100歳にちなみ、「百歳万歳」というネーミングの焼酎。初心忘るべからず。まだまだ邁進していくぞと気持ちを引き締めた次第でした。

H 本誌にも掲載していますが、初めて間近でドローンを見ました。思っていた以上にサイズが大きく、見た目もカッコ良かったです。飛行する際は、プロペラ音が大きく迫力もありました。撮影にご協力いただき誠にありがとうございました。